

## ■いま改めて「おんな」の「運動」について考える

村上 潔（立命館大学大学院非常勤講師、現代女性史）

### 1. 問題意識

2008 年、〈女性と貧困ネットワーク〉が立ち上げられ、《労働》の周縁に置かれた女性たち自身が、《労働と女性》の関係、それによって生じる《女性と貧困》の関係を根本から捉えなおす契機が生まれた。

一方、いわゆる 2011 年「3.12」以降には、放射能の「市民測定所運動」といったかたちをとって、各地の母親／主婦たちによる自律的な生活防護行動が展開されている。また、それ以前から、消費者運動や地域の環境に関わる運動は、主に主婦たちが担ってきた。

では、それらはつながっているのかいないのか、つながる必然性はあるのかないのか——容易には判断がつかない捉え難い状況のなかで、いま想定されうる《おんなの運動》とはいったいいかなる特質でもって規定できるものなのだろうか？ 主体となる「女」を位置づける多様な側面、それにもとづく運動・理論体系、さらにそうした枠組みに対する当事者の葛藤などを検討することを通して考えてみたい。

### 2. 考えていること

◆現在の日本の「古くて新しい」女性運動の意味を確認し、その評価を試みる。

「古くて新しい」というのは、「主婦／母親」役割を積極的に受け入れた女性たちが運動主体である状況を指した表現である。戦後日本の、いわゆる母親運動、消費者運動、生協運動、環境運動では、主に「主婦／母親」が主体となっていたのは周知のとおりである。ただ、そうした主体性は、1980 年代以降、女性学／フェミニズムによって批判的検証に晒され、徐々に、「主婦／母親」を主体とした女性運動は、「性別役割を固定化する本質主義」であり、ある意味「反動的」であるという認識が定着していった。

それが、いわゆる「3・12」——2011 年 3 月 12 日の原発事故による放射能公害「以後の状況」を的確に捉えることを目的として、矢部史郎氏が提起したキーワード——以後、「主婦／母親」が主体となり、それを前面に出した取り組みが、日本全国で自然発生的に生まれてきた。まずはこのことの意味をしっかりと考える必要がある。また、こうした状況に対して、従来どおりの本質主義批判で警鐘を鳴らすフェミニズムの側からの反応も散見されるが、それが意味があることなのかどうか、そうした「アプローチ」自体が適当なことであるのかも、考えなければならない。

### 3. 考える際の視座

まず注目しておきたいのは、彼女ら——「主婦／母親」という立場での女性運動の主体——がもっとも重視しているのは、「暮らし」・「生活」の防衛だということである。この点は、まったくもって「古い」性質であり、普遍的な問題意識といってよいかもしれない。では、これはたんに数十年間と何も変わらない運動なのだろうか？ そうではない。そこには、いったん「失った」女性運動のメイン・イシューを、「取り戻す」という意味があると、報告者は考える。彼女らは、そのために、フェミニズムによって意図的に奥に押し込めら

れた運動の「立ち位置」を、再び引きずり出して、再活用しているのだ。「暮らし」・「生活」と、「主婦／母親」。それは、「女性の社会進出」、「女性の能力の活用」といった、いまの国家・企業社会による、そしてまた同時にフェミニズムによる問題設定とは相反するものである。こうしたことを確認したい。

#### 4. 「主婦／母親」という人たち

◆公的なフィールドの外部にあり、マイナーであり続ける存在。

国内難民となった人の多くは子供をもつ母親たちです。私は名古屋に移住してから、食品や土壌の放射能を測定する「市民測定所運動」に加わったのですが、[…]、その測定運動で出会うのが、子供をもつ主婦たちです。[…]

彼女たちは知っているんですよ。自分たちがマイナーな存在であることを。

自分たちがどんなに正しいことを言っても誰にもまともに相手にはしてもらえない。頭のおかしい、それこそ「パニック」を起こした人間としか扱われないだろうと。

男性社会や企業社会のメジャー（ものさし）から、あらかじめ排除されたものとして、はじめからメジャーの外にあるということを知っている。そして、自分たちが主張していたことの正しさが後になって証明されても、誰にも感謝されず、誰からも謝罪をされないということまで知っている。

さらに、メジャーがとりこぼしたものによって今後引き起こされる、さまざまな事態の尻ぬぐいをさせられるのが自分たちだということまで知っている。スーパーで食品を吟味することから、具合の悪い子どもを病院に連れていくことまで、結局自分たちにツケがまわってくることを、経験的に理解しているのです。（矢部 2012: 43-44）

- 消費者運動・生協運動・公害運動の主婦たちの共通性
- 「裏側」に立つこと
- 私的・限定的資源

#### 5. 「主婦／母親」に限らず「生活者」としてあること

◆〈女性と貧困ネットワーク〉立ち上げ集会採択アピール「女性で安心な社会に——女性の貧困のほんとうの解決策へ声をあげましょう」（2008年9月28日 女性と貧困ネットワーク立ち上げ集会参加者一同）\*抜粋。下線は引用者。

私達は、様々な貧困問題に直面する女性たちが集まり、女性と貧困の問題の実態を明らかにし、訴え、女性たちの貧困の真の解決を図るために「女性と貧困ネットワーク」を結成します。私達は全国の仲間と情報を共有し、貧困にさらされている女性達の問題解決のために助け合いのネットワークを広げます。女性の貧困問題の解決のために、提言を行なっていきます。

これまでの貧困問題の解決のための活動に敬意を払うとともに、提案をします。一つは、貧困状態にある男性の意識の問題、たとえば「男が妻子を養わなければならない」という認識が男性たちをより一層追い詰める要因になっていることへの気づきで

す。二つ目には女性の貧困を可視化し、女性が心身ともに自立できる労働とセーフティネットを充実させることが、すなわち男性の貧困問題の解決につながることを共有化したいと思います。三つ目は今ある「労働市場」に「男性並み」に参入することではない働き方を作り出していくことです。労働基準法や産休等の様々の権利を企業・行政に働きかけ、時には法そのものを変革するなかで、男性中心の「労働」のイメージと現実を変えていくことです。それは女性のみならず男性にとって「賃労働者」としてだけではなく「生活者」として生きる姿を示していくことでしょう。女性の働き方を考えること、それは労働の根幹を揺るがす力を持ち得るのです。女性も男性も共に「人としての尊厳」を持続できる、差別のない公正な雇用と安全で心豊かな社会を目指して、共に力を携え合いましょう。最後に、私たちのネットワークを、一緒にあなたの身近な人に伝えてください。

- 労働の場から／場の設定から、「生活」を問い直す試み。
- 「貧困」を問題化する際に不可避な、「労働」と「生活」との関係性の提示。

## 6. 何が問題か

- 役割が固定化することを批判するとして、そのあと何を想定するのか。
- ケア役割を公的なフィールドに乗せることで女性の位置を引き上げるのか。
- 「抑圧」を〈女〉に引き受けさせる権力の問題性をいかに問い、追及するのか。
- 「公共性」と「生活世界」の問題（篠原 2012）。
- 「コレクティブ」か、現場闘争か、その両方か？
- 〈おんな〉の生活性に根差した運動論——再生産労働を基軸にした世界秩序の構築——を「メジャー化」するのではなく「全体化」する。

全体性とは、生活という組織体を織り成すさまざまないとなみを、集め、関係づけ、出合わせ、織り成していく作用であり、はたらきのことだ。こうした意味での全体性があるのはじめて、生活は、組織体となり、存続可能なものとなる。

……ひそやかに、だが着実に現れつつある何ものかの断片を関係づけ、織り成していくための全体性は、これから新たに発案し、創出していかなくてはならないたぐいのものだ。それは、……表向き明るさを装わされつつ束ねられ硬化と停滞を強いられている生活を解きほぐすところに、回復され、蘇生することになるだろう。（篠原 2012: 26-27）

## 【参考文献】

- LeBlanc, Robin M, 1999, *Bicycle Citizens: The Political World of the Japanese Housewife*, University of California Press. (=2012, 尾内隆之訳『バイシクル・シティズン——「政治」を拒否する日本の主婦』勁草書房.)
- 松本麻里, 2011, 「原発と再生産労働——フェミニズムの課題」, *Japan - Fissures in the Planetary Apparatus*, (2012年7月25日取得, <http://www.jfissures.org/2011/11/28/nuclear-energy-and-reproductive-labor-%E2%80%93-the->

task-of-feminism/).

村上潔, 2011, 「女性と／の貧困」の問題化におけるアジェンダと展望——〈女性と貧困ネットワーク〉の事例から」『社会文化研究』13: 65-90.

篠原雅武, 2012, 『全 - 生活論——転形期の公共空間』以文社.

矢部史郎, 2012, 『3・12 の思想』以文社.